

「持続可能で豊かな社会の構築」をめざし、 R-GIRO研究プログラムは、 第1フェーズから第2フェーズへ

立命館グローバル・イノベーション研究機構(R-GIRO)は、2008年4月に立命館大学の研究高度化施策の一つとして設立されました。「持続可能で豊かな社会の構築」を設立理念とし、日本が緊急に解決すべき研究領域に特化した研究を推進し世界に誇れるサステナビリティを追求する最先端の研究拠点を形成するとともに、それを通して世界で活躍できる若手研究者の育成を目的とし、この目標達成に2段階のフェーズで臨んでいます。

第1フェーズの研究プログラム「特定領域型R-GIRO研究プログラム」では、2008年10月より「環境」「エネルギー」「食料」「材料・資源」「医療・健康」「安全・安心」「人・生き方」「平和・ガバナンス」「日本研究・地域研究」「融合新研究」の10分野を重点研究領域に定め、4年間かけて学内より33プロジェクトの

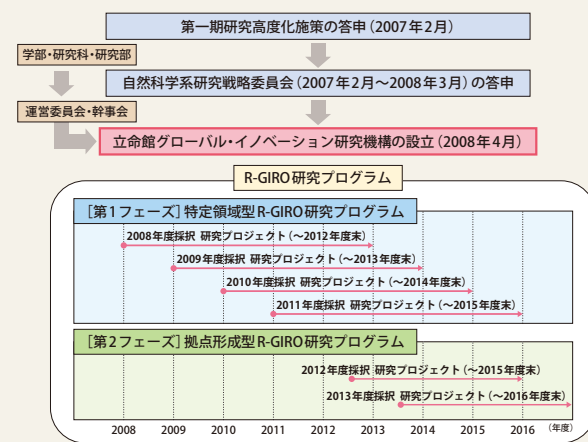
公募・採択を行い、現在も21プロジェクトが進行中です。途中経過ではありますが、このプログラムの推進により、若手研究者育成、学術論文、産学官連携等において多くの実績を挙げることができました。

この第1フェーズの実績を基にR-GIROの理念および目的の実現に向けその進捗をさらに加速化させるため、本学の強みである分野横断力、分野統合力による「特色ある異分野融合型研究拠点」の形成に向けた第2フェーズ「拠点形成型R-GIRO研究プログラム」を2012年度より開始しています。

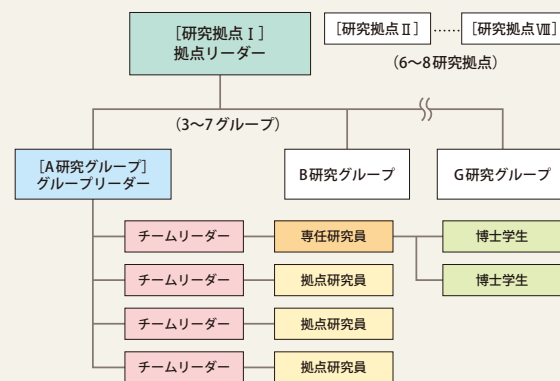
本プログラムでは、第1フェーズと同様に10領域(「融合新研究領域」は「基盤・融合新研究領域」に改称)を研究対象とし、学内から幅広く文理融合など特色有る異分野融合が可能な研究プロジェクトを公募し、2012年度は4研究拠点(5プロジェクト)を採択

しました(下表参照)。一つの研究プロジェクトには、代表者である拠点リーダーの下に3~7名のグループリーダーを配し、各グループリーダーが学内外からの複数のチームリーダーを統括する体制を基本としています。2012年度に引き続き、2013年度も5月より学内公募を開始し、申請されたプロジェクトに対して約2ヶ月に及ぶ審査(①学内審査委員による書類審査、②学内書類審査結果に対する学外審査委員への意見聴取と採択候補プロジェクトの選定、③学内外審査委員によるヒアリング審査)を行い、4研究拠点(4プロジェクト)を採択いたしました。これらのプロジェクトに対して、2016年度まで年度ごとにその実績を評価しながら、政策的・戦略的・計画的な支援を行っています。

〈R-GIRO研究プログラムの経緯〉



〈拠点形成型R-GIRO研究プログラムの組織体制イメージ図〉



〔拠点形成型R-GIRO研究プログラム 2012年度採択プロジェクト一覧〕

| 研究拠点 | 研究拠点名 | 拠点リーダー | 職名 | 所属 |
|-----------|--|--------------|-----|----------------|
| エネルギー研究拠点 | 太陽光発電マルチスケール研究拠点 | 峯元 高志 | 准教授 | 理工学部 |
| 食料研究拠点 | 農水産業の6次産業化(総合産業化)による新しい食料生産システム研究拠点 —食農連携モデルの創出と地域における実証— | 松原 豊彦 | 教授 | 経済学部 |
| 先端医療研究拠点 | ものづくり科学技術で興す医療・健康イノベーション拠点 ITと医療の融合による次世代e-Healthの研究 | 小西 聡 陳 延偉 | 教授 | 理工学部 情報理工学部 |
| 人・生き方研究拠点 | 法心理・司法臨床センター | 稲葉 光行 | 教授 | 政策科学部 |

〔拠点形成型R-GIRO研究プログラム 2013年度採択プロジェクト紹介〕

環境研究拠点

アジア太平洋地域における水・資源再生循環システム研究拠点

拠点リーダー:理工学部教授 中島 淳

気候変動によって深刻化する水問題を緩和し、持続可能な水利用を実現するためには、利用した水を再生・再利用し、新しい水循環系を創出することが肝要です。

本研究拠点では、「水再生スマートグリッド」として、適正な水再生技術のイノベーションと新しい水循環システムのイノベーション、そしてそれらの実装による地域水管理政策を研究・検討します。その中には建築や設備、景観のデザイン、水処理で発生する汚泥や他の廃棄物の再生循環、そしてこれらシステムの実行を可能にする地域マネジメント政策も含まれます。これらの統合した技術—マネジメントのパッケージセットは、我が国の将来型水インフラ産業の育成、統合的水ビジネスの発展に貢献することができます。



先端医療研究拠点

持続可能で健康な社会を実現する運動空間創成科学の研究拠点創成

拠点リーダー:スポーツ健康科学部教授 伊坂 忠夫

政府の掲げる2030年のあるべき姿、社会像の一つに「少子高齢化先進国としての持続性確保」が挙げられます。本研究拠点では、「運動空間」(「運動を行う(える)空間」、「運動したくなる空間」、「異なる運動が共存できる空間」、「運動を観る空間」、「運動活動による活性化した空間」を統合した概念)を具現化するために、新しい学際研究領域「運動空間創成科学」を創設し、日本の持続性ある健康な社会の実現に貢献します。具体的には、「そこにいるだけで動きたくなる空間」のモデル構築とその構築に必要な実装メカニズムの解明や技術開発を行うことで、健康づくりのみならず、運動を通じた老若男女の交流の場(コミュニティ)の形成、さらに安全・安心のまちづくりと地域の活性化を実現します。



日本研究・地域研究拠点

自然と人間が共存可能な新たな文明の創造に向けた「環太平洋文明学」の構築拠点

拠点リーダー:文学部教授 高橋 学

本研究拠点では、環境と文明のあり方を根本から問い直し、世界標準時に認定された水月湖における年縞研究を基軸に、環太平洋地域の災害と文明の興亡の相関を解明することで、自然と人間が共存可能な新たな文明論を構築します。すなわち、本来、人類学、考古学、地理学は協働し人間の文化と社会の多様性の認識を通して未来を展望する使命を共有していたことから、その再統合の第一歩として、「環太平洋文明学」を構築します。そこではとりわけ、環境考古学および地理学から文化人類学へ「物質循環」の概念を導入し、大量生産・大量消費の市場原理主義に代わる新たな文明の価値観を探究・創造し、持続可能な社会であるための方策を見出し、新たな文明の時代を切り開くためのビジョンを提示することを目的とします。



平和・ガバナンス研究拠点

平和協力推進を支える研究拠点

拠点リーダー:国際関係学部教授 本名 純

本研究拠点の目標は、日本社会が主体的役割を果たす国際平和協力政策、及びその基礎となる相互理解の推進を学術的にバックアップする日本初の研究拠点を構築すること、そして、そのために必要な新たな研究パラダイム(新学術領域)を創成することです。すなわち、地域研究・理論研究・政策研究に加えて、社会成熟研究という異なる4分野を融合して、紛争解決や国際平和協力政策に関する統合的な知の集積・創造・発信を進め、研究期間終了時には、日本による主体的な国際平和協力政策を支える学術的研究拠点、立命館平和研究センター(仮称)を発足させます。政府機関、国際機関、市民団体、教育機関に対して、日本発の国際平和協力政策を提言するシンクタンク的な役割をも備えたユニークな学術研究センターを目指します。

